

# PETRONAS SYNTIUM TEAM

## PETRONAS SYNTIUM TEAM REPORT

スーパー耐久シリーズ2009  
第3戦「鈴鹿500km」  
2009年6月6-7日

▲▽▲6月6日 予選 天候:曇り 気温28℃(午後12時30分)

2009スーパー耐久シリーズ第3戦の舞台は三重・鈴鹿サーキット。  
決勝レースでの走行距離が500km、そして予選を土曜日、決勝を日曜日に行う従来のスタイルで行う今シーズン初めてのイベントとなる。

開催を前に、金曜日には非公式の専有走行が1時間×3回行われたが、この日の鈴鹿はあいにくの雨。しかも時折かなり雨脚が強くなる本格的なレインコンディションとなり、残念ながらドライセッティングの確認を行うことができずに終わった。

迎えた土曜の予選。天気は薄曇ながら気温も高く、蒸し暑い朝を迎える。幸い、前日夜には雨も止み、路面もドライコンディションで走行が可能な状態。よって、ドライバーにはタイムアタックはもちろんのこと、その前にクルマのチェックをすることが求められた。

Aドライバーの予選。まず、先にコースインしたのは、No.1 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの谷口信輝。路面コンディションやセッティングをチェックし、アタックを開始した。15分間アタックの残り5分の時点で暫定トップタイムとなる2分12秒516をマークしたのだが、その後、No.35のフェアレディZがこれを上回ったため、谷口は2番手で予選を終えた。

一方、No.28 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの片岡龍也。ピットでの作業に時間を取られたため、やや遅れてコースインしたのだが、ほどなくして28号車のコックピットパネルに電子制御関係のウォーニングランプが点灯。片岡はベストコンディションでのアタックチャンスを失っただけでなく、クルマの基本的なセットアップ自体もままならない状況に置かれてしまった。結果、2分13秒635のタイムで暫定4番手に甘んじてしまった。

30分のインターバルを挟み、Bドライバーのアタックがスタート。1号車には柳田真孝が乗り込む。先にアタックを終えた谷口からのインフォメーションをもとに、柳田が計測を開始。谷口とほぼ同等のタイムをマークしたあと、さらにタイムアップを狙った。ところが、その直後の最終コーナーで1台の車両が飛び出し、セッションは赤旗・中断に。予選はおおよそ5分後に再開、改めてベストタイム更新を狙った柳田は2分11秒116をマーク、暫定トップ獲得に成功した。

また、28号車はトラブル修復の作業を続けたが、吉田広樹の出走までには完了せず。存分なコンディションでのアタックができなかった吉田は2分14秒006のタイムで暫定4番手につけた。

結果、A、Bドライバーの両タイムの合算により、PETRONAS SYNTIUMチームは1号車が4分24秒428で今季2度目のポールポジションを獲得。28号車は4分27秒641のタイムで4番手、セカンドローから決勝を迎える。

▲▽▲6月7日 決勝 天候:晴 気温25.5℃(午後3時)

決勝日を迎えた鈴鹿。やや風は強いものの、朝から爽やかな日差しがサーキット一面に広がった。  
午前8時から行われたフリー走行。No.1 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEは、谷口→ハイルマン→柳田のオーダーで走行チェック。一方のNo.28 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEは、片岡→アズミ→片岡のオーダーで30分間の練習を終えた。

決勝を前にしたピットウォークでは、今月4日に誕生日を迎えた柳田真孝選手にケーキが用意され、チームドライバーらが手荒く祝福するなど、楽しい雰囲気。しかしその一方で、ピットでドライバー交代の練習を最後まで行うなど、近づく決勝に向けて、みな静かに士気を高めていく様子が見て取れた。

午後1時30分、照り返しの強い日差しを受け、ダミーグリッドについた全32台がコースを離れて、87周にわたる決勝レースが始まる。谷口が乗る1号車はポジションキープのトップ、そして片岡がステアリングを握る28号車は好スタートを切って3位に浮上した。さらに片岡は前を行くNo.10 Zがオーバーランしたため、2位に。これで、PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台が早くもワン・ツー態勢を築くことになった。

# PETRONAS SYNTIUM TEAM

快調なペースを維持するトップ1号車、それを追う28号車。いつしか2台は他の車両を大きく引き離し、申し分のないレース運びを披露した。だが、31周目にひとつの転機が訪れる。谷口、片岡ともに通過後のヘアピン進入手前で、1台のマシンがオイル漏れを起こしたのを機に、次々と後続のクルマが足元をすくわれコースアウト。すぐさまセーフティカーがコースインした。

このアクシデントによって、PETRONAS SYNTIUMの2台が積み上げてきた大量のマーヅンは惜しくも消え去ることになったが、チームではタイミングを計りピットインを実施。1号車はF・ハイルマン、そして28号車はJ・アズミへとスイッチする。1号車はちょうど同じタイミングで隣接する車両がピットインしたため、ピット前での作業に時間を取られてしまったが、的確な判断で作業をこなし、コースへと復帰。36周目のリスタート後には、再びトップから周回を重ねていった。

一方、28号車は後続のNo.10 Zとのバトルが次第に白熱化。ともにルーキー同士のテイル・トゥ・ノーズが何周にもわたって展開され、観客をひきつけた。何度も後方からの追撃をかわしてきた28号車のアズミだが、49周目のシケイン1つ目でサイド・バイ・サイドとなり、接触。スピンを喫したアズミはすぐにコースへ復帰できず3位に後退したが、幸いクルマへのダメージはほとんどなく、そのまま走行を続行した。

その後、No.10 Zに対して接触行為によるペナルティストップが科せられたため、No.10 Zと3番手28号車との差が大きく縮まる。そして、54周終了時に1号車がハイルマンから柳田へ、そして56周終了でアズミから吉田へとルーティンワークを実施。1号車はタイヤ無交換で、また28号車においてはリア2本のみを交換。拮抗するNo.10 Zとの戦いで優位に立つための作戦を遂行した。

レースは終盤の戦いへと突入、60周を終えてNo.10 Zがピットイン、この作業中に28号車の吉田がメインストレートを通過。これによって、再びPETRONAS SYNTIUMの2台がワン・ツー体制を確保。このままのフィニッシュライン通過を目指し、柳田と吉田が渾身の走りを見せた。

レースは70周を迎え、28号車とNo.10 Zとの攻防戦が激化。ラップダウンの車両をさばきながら、かつ後続から迫り来るライバルを懸命に退ける吉田。まさに手に汗握るバンパー・トゥ・バンパーの戦いを10周以上を繰り広げたのだが……。81周目、このバトルの最中に、前を行くラップダウンの車両との接触があった28号車に対し、ドライブスルーペナルティが提示される。吉田は83周終了時にこれを消化、3位から改めてゴールを目指すこととなった。

一方、トップに君臨する1号車の柳田。タイヤ無交換のまま走行するクルマはペースこそ存分に上げることは難しいが、そつのない走り続け、安泰ムード。前戦、マシントラブルにより悔しい結果になったその借りを返すべく、力強い走りを披露した。そして迎えたファイナルラップ。1号車は最後まで独走を貫き、トップでフィニッシュラインを通過、また激しいバトルを戦いぬいた28号車が3位でチェッカー。PETRONAS SYNTIUMチームは、開幕戦以来、2台が揃って表彰台へと上がった。

# PETRONAS SYNTIUM TEAM

## ◆鈴木哲雄監督

セーフティカーが入る展開となりましたが、チームにとってはプラスにもマイナスにもなったような、ならなかったような、そんなレベルでした。気温や路面温度は上昇しましたが、タイヤのコンディションが良かったので、交換しなくても最後までパフォーマンスは保てるだろうと思っていました。シリーズポイントではまだ追う立場ですので、これからはしっかりと頑張っていきたいですね。

## ◆No.1 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

### 谷口信輝

スタートドライバーとして頑張りました。あとの2人にいいポジションでバトンを渡せるようにと、懸命にプッシュしましたね。その結果、十分なマージンを築くこともできたのですが、セーフティカーが入ることになり、マージンが大幅に減ってしまったのが残念です。でも今回一番心配だったのは、(前回のよう)マシントラブルで点数が取れなくなることだったので、今日は結果を残すことができホッとしています。

### 柳田真孝

いいレースができました。タイヤは周回を重ねてもペース的に問題なかったので、無交換でいこうということになりました。一応、ピット前にはタイヤを準備していましたが、菅生でも同じような状況で走っていたので、自分としては落ち着いて対応できました。今日の結果はチームとして総合力で勝ち取ったものと思います。ただ、独走になったので、クルマが壊れないようもっと頑張って走ったほうがいいのかなど、いつもは考えないようなことが頭に浮かびました。フルマークの点数が取れたことがうれしですね。いいクルマを準備してくれたチームに感謝しています。

### ファリーク・ハイルマン

走り始めてしばらくすると少しハンドリングに違和感を覚えたのですが、うまく自分でマネージメントして走ることができました。今週末はドライコンディションでのテストができず少し不安だったので、レースではペースをうまくキープさせて走ることが大事だと思いました。1号車のみんががいい走りをして、いい結果を残すことができたので、とてもうれしいですね。僕のステントは後半になって後続との差が開いたので、レースにできるだけ集中しながら走ることを心がけていました。

## ◆No.28 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

### 片岡龍也

チームとしてワン・ツーフィニッシュができるかと思ったので、残念ですね。吉田選手は気持ちに焦りが出たのかもしれませんが、でも、ミスもひとつのいい経験。今後の糧にして次のレースにつなげてもらいたいですね。ジョハンもいい走りを見せてくれました。この二人の経験値が上がることによって、速さにも反映されてくると思います。今回は、トラブルがあってクルマのセットアップに時間が取れず、厳しいコンディションではありましたが、その中でも上手くレース運びはできたと思います。

### 吉田広樹

リアタイヤの2本だけを交換してコースに向かいましたが、前後のバランスが異なることや、燃料を積んでいたのも、自分のステントの序盤はアンダーが強く、なかなかタイムアップさせることができませんでした。次第にバランスが取れるようになってからはいいペースで走ることもできたし、10号車も押さえていたのですが、バトルが続き、気持ちの焦りもあって、周回遅れのクルマと接触してしまいました。悔しい結果ではありますが、そのぶん勉強もできたと思うので、この借りはまたレースで返したいと思います。

### ジョハン・アズミ

初めて走る鈴鹿でのレースで、僕のステントにセーフティカーが入ることになったので正直焦りました。しかしながら、チームがつねに無線で的確な情報を送ってくれたので、以後は落ち着いて周回を重ねることができました。10号車との接触もありましたが、接近戦の中では十分に起こりうることだと思っていました。結果は3位でしたが、自分の中ではいい仕事ができたと考えています。